

ドイツ語の事態把握をめぐって  
——日独英対照の観点から——\*

大藪正彦

1. はじめに

本稿ではドイツ語学の立場から、日本語、ドイツ語、英語に見られる事態把握 (construal) の傾向の異同とその関連現象について論じる。事態把握を構成する要素として、認知文法では、詳述性 (specificity), 焦点化 (focusing), 際立ち (prominence), 視点 (perspective) などが取り上げられるが (Langacker 2008: ch. 3), このうち、日本語との対照研究でしばしば問題とされるのが、視点の取り方である。「事態の内・外」, 「主観的・客観的」, 「I モード・D モード」など、いくつかの異なる名称で呼ばれる現象は、前提となる理論的基盤や細かなニュアンスの差を無視してよければ、基本的には類似の現象を捉えようとして提案された概念だといえるだろう。

一般にドイツ語の事態把握について論じる場合、どうしても「英語・ドイツ語」対「日本語」という大枠で論じられることが多い。このこと自体が大きく間違っているとはいえないが、一方で「ヨーロッパ言語」という括りによって一部の現象がふるいにかけられているという点も否めない。本稿では、限られた紙幅ではあるが、ドイツ語学の立場からこれまでの研究を相対化し、英語学ひいては言語類型論へのささやかな貢献を目指したい。

2. 議論のシナリオ

すでにさまざまな形で指摘されているとおり、日本語では、事態を「自己中心的」な視座から捉え、「見え」のままに言語化する傾向が強いといえる。その場合、話し手 (主体) は、言語化の対象となる事態 (客体) にいわば埋め込まれた格好となり、両者の境界はあいまいになる。そのようなスタンスでは自己は言語化の対象となりにくい。一方、英語やドイツ語では、話し手 (主体) は事態 (客体) に対し距離を取った形で事態把握を行う傾向が相対的に強い。その場合、主体と客体の境界は明確である。そのようなスタンスでは、自己を含む状況であっても、自己が客体化された形で言語化されるということが起こる (とりわけ Ikegami (2015), Ozono (2008))。

(1) a. まもなく金沢です。(列車のアナウンス)

b. In Kürze erreichen wir Kanazawa Hbf.  
shortly reach we Kanazawa Central

上例において、日本語では「自己中心的」な視座が取られている——自己は見えない——のに対し、ドイツ語では「自己分裂」の構図——自己を把握している自己がいるという構図——になっている。この例に関していえば、ドイツ語は英語と同じである。

さて、事態把握における視点をめぐる一連の議論は中村 (2004, 2009, 2016) に譲ること

\* 本研究は科学研究費助成事業の助成を受けている (課題番号 16K02664, 15H03199)。

にして、ここではこれら2つの事態把握のタイプを、説明的に「主客未分」の事態把握と「主客対峙」の事態把握としてまとめておく。これまでの対照研究では、一般に2つの事態把握のタイプを両極として議論が進められることが多い。ただし本稿では、特に話し手の視点の移動を考慮した2つのサブタイプ、「主客未分」+「自己投入」の状況と「主客対峙」+「自己分裂」の状況に注意を払っておきたい。

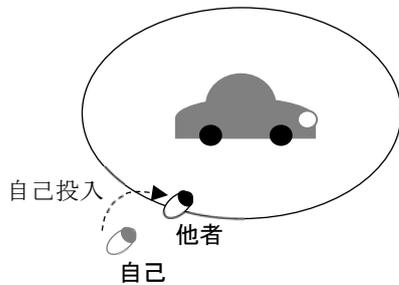


図1：主客未分+自己投入

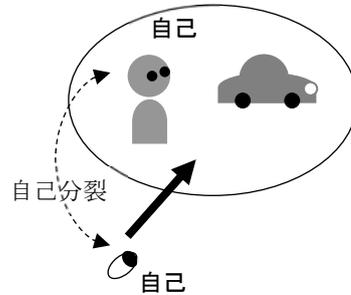


図2：主客対峙+自己分裂

図1は、誰か他者の目の前に車がある状況を、その人の視点から「(目の前に)車がある」と捉える場合である。ヨーロッパの言語では比較的まれな把握の仕方かもしれないが、いわゆる「自由間接話法」(ドイツ語文法では「体験話法」と呼ばれる)では、このタイプの事態把握が根底にある(三瓶(2017))。それに対し図2は、事態の中に自己が含まれる状況を、事態の外から「私の前に車がある」と捉える場合である。この場合、自己が客体化されて言語化されることになる。

以上が認知主体としての話し手のスタンスに関わる問題だとすると、次に、同じく認知主体としての聞き手のスタンスにはどのようなものが想定され得るであろうか。話し手が「主客未分」のスタンスを取る場合、次の図3に示すように、聞き手のほうでも話し手のスタンスに歩み寄る必要が出てくる。そうすると、聞き手も「主客未分」のスタンスに立つことになるため、結果、話し手、聞き手、事態の三者が未分化な状態となる<sup>1</sup>。一方、話し手が「主客対峙」のスタンスを取る場合は、図4に示すように、聞き手のほうでも、言語化される事態に対して距離を置いて向き合うことが可能となる。その結果、話し手と聞き手が向かい合う形での「対話」が可能となる。

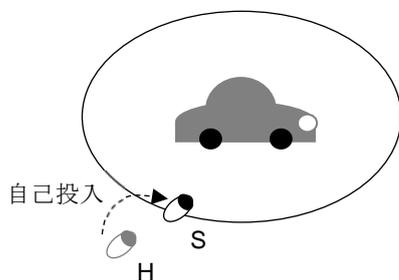


図3：主客未分と聞き手

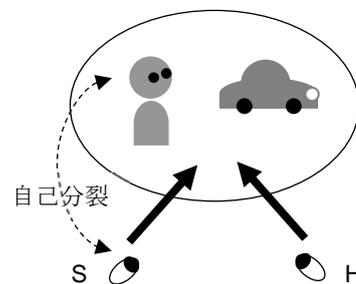


図4：主客対峙と聞き手

(S=話し手, H=聞き手)

<sup>1</sup> 図1のように、もともと話し手が他者に自己投入して事態を把握していた場合は、さらに聞き手の自己投入も加わり、幾重にも視点が重なり合う状況となる。

以上のことから導き出される仮説は、「主客未分」の事態把握は話し手・聞き手の「同型的」なスタンスと、「主客対峙」の事態把握は話し手・聞き手の「相補的」なスタンスと、それぞれ親和性が高いというものである (Ozono (2017))。この点を踏まえ、次節以下では、日本語、ドイツ語、英語に特徴的な話し手・聞き手の振る舞いを具体例に即してみたいことにする。

### 3. 主観性をめぐって：話し手のスタンス

有名な「雪国」の冒頭文から始めよう。

- (2) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。(川端康成「雪国」)
- b. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das „Schneeland“ vor ihm weit ausgebreitet. (O. Benl 訳) (直訳：列車が長い国境のトンネルから這い出たとき、「雪国」が彼の前に広大に横たわっていた。)
- c. The train came out of the long tunnel into the snow country. (E. G. Seidensticker 訳)

日本語では語り手（主体）の「見え」がそのまま言語化されているのに対し、英語やドイツ語では語り手（主体）と事態（客体）の間に距離が置かれているというものである。しかしながら、よく見るとドイツ語では従属節と主節を用いて、日本語をなぞるような形で訳出されている（「…したとき、…」）。少なくとも時間的な経過が「順次的」な形で表現されているわけであるが、一方英語訳ではそのような構成にはなっておらず、いわば「総括的」な訳出になっている。そう考えると、次の例のように、ほかにも多くの類例があることに気づく。

- (3) a. 片桐がアパートの部屋に戻ると、巨大な蛙が待っていた。(村上春樹「かえるくん、東京を救う」)
- b. Als Katagiri in seine Wohnung kam, wartete dort ein riesenhafter Frosch auf ihn. (U. Gräfe 訳) (直訳：片桐が自分の住まいに戻ったとき、そこで巨大な蛙が彼を待っていた。)
- c. Katagiri found a giant frog waiting for him in his apartment. (J. Rubin 訳)

なお、「雪国」の冒頭文が極めて日本的な表現であるかのように紹介されることがあるが、類似の例はドイツ語でも簡単に見つかる。次はドイツのノーベル文学賞作家トーマス・マンによる「魔の山」からの引用である。(4b) の日本語訳はほぼ直訳である。参考までに英語訳も挙げる。

- (4) a. Stockfinstere Tunnel kamen, und wenn es wieder Tag wurde, taten weitläufige Abgründe mit Ortschaften in der Tiefe sich auf. (Th. マン「魔の山」)
- b. まっくらいトンネルがいくつもつづき、ふたたび明るくなると、底に部落の見えるひろい谷間がひらけた。(関・望月訳)
- c. There were pitch-black tunnels, and when day-light returned, vast chasms were revealed, with a few villages far below. (J. E. Woods 訳)

以上、ドイツ語において「主客未分」の事態把握が、萌芽的であれ、確認できる状況を見たわけであるが、そうはいっても、「主客未分」の事態把握はやはり日本語においてより顕著である。次に、「日本語」対「英語・ドイツ語」の対比が確認できる例として、直示表現の例を見ておこう。いずれも村上春樹の「海辺のカフカ」からの引用であるが、(5) は主人公が一人称で描写されている箇所からの、(6) は主人公が三人称で描写されている箇所からの引用である（強調は本稿の筆者による）。

- (5) a. 彼女は [...] <sup>からだ</sup> 身体の向きを変えてこちらに視線を向ける。(村上春樹「海辺のカフカ」)
- b. [...] sie [...] dreht sich und richtet ihren Blick auf mich. (U. Gräfe 訳) 〈直訳：彼女は向きを変えて視線を僕のほうに向ける。〉
- c. She [...] turns in my direction. (Ph. Gabriel 訳)
- (6) a. そのとき背後で小さな笑い声のようなものが聞こえた。ナカタさんが後ろを振り向くと [...] 美しい細身のシャム猫が [...] こちらを見ていた。(ibid.)
- b. Auf einmal ertönte hinter ihnen ein leises Lachen. Als Nakata sich umwandte, sah er [...] eine schöne schlanke Siamkatze, die [...] zu ihnen herüberschaute. (ibid.) 〈直訳：突然彼らの後ろで小さな笑い声が響いた。ナカタさんが振り向いたとき、彼は彼らのほう を見ている美しい細いシャム猫を見た。〉
- c. Just then Nakata thought **he heard** a small laugh behind him. **He** turned and **saw** [...] a lovely, slim Siamese looking at him [...] (ibid.)

まず下線部分に着目すると、日本語では「こちら」や「背後」などの直示表現が使われている。指示の原点はどこかと問われれば、通常は語り手のいるところということになる。本来その場所は読み手のいる場所とは異なるはずであるが、読み手はこれらの文章を読んだとき、特に問題なく語り手の位置に自分を置いていると思われる。一方、ドイツ語訳・英語訳では、いずれも空間指示の参照点が客観的に表示されている (*auf mich*, *hinter ihnen* など)。

さらに次の点も指摘しておいてよいだろう。上の日本語の例 (6a) においては、三人称が主人公の場合でも直示表現が用いられている。つまり、語り手は、事態の中に入り込み、そこに臨場する形で、三人称主人公を原点として事態を描写しているわけである（自己投入の状況）。日本人読者であれば、特に違和感なく上のテキストを読むものと思われるが、そうすると読み手の側でも無意識のうちに同じスタンスを取っていることになる。一方で、ドイツ語訳・英語訳のほうは、一人称主人公の場合であっても、直示表現は用いず、主人公（＝僕）自身を明示的に言語化している（自己分裂の状況）。つまり、上例に関していうと、日本語では一貫して「主客未分」のスタンスが、ドイツ語・英語では一貫して「主客対峙」のスタンスが取られているわけである。ついでながら、(6) のドイツ語訳・英語訳では、知覚動詞 *sehen*, *see* などが補われている点にも注目しておいてよいだろう（太字部分）。注意深く読めば気づくとおり、日本語の原文では主人公（＝ナカタさん）の「見え」が描写されているわけであるが、日本人読者が違和感なく読み進めているとするならば、それは取りも直さず、読み手も主人公（＝ナカタさん）および語り手と視点を重ね合わせてい

る、つまり同型的なスタンスを取っているということにほかならない。

#### 4. 主観性から間主観性へ：聞き手のスタンス

すでに聞き手のスタンスにも話が及んだが、ここで話し手と聞き手のスタンスの取り方についてもう少し詳しく考えてみよう。心理学者の浜田によれば、主体と主体が出会った時の心のあり方には、2つの可能性があるという。1つは、能動と受動をやり取りするというもの（相補性の構図）、もう1つは、相互に同じ型を取るというもの（同型性の構図）である。視点の取り方でいえば、前者は「目が合う」、後者は「いっしょに見る」ということになる（浜田 (1999)）。

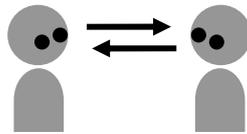


図 5：相補的スタンス

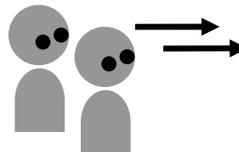
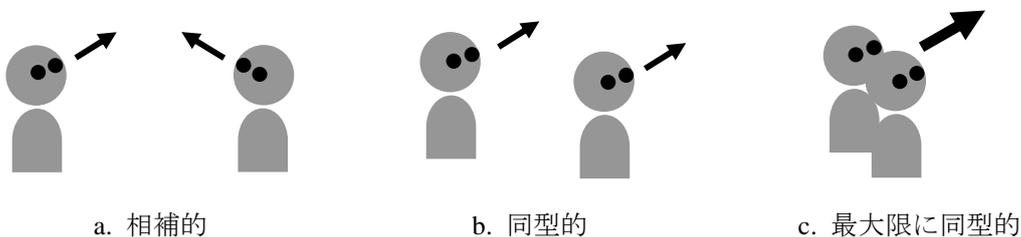


図 6：同型的スタンス

2人の人間が具体的に言葉を交わす場面を考えてみよう。話し手と聞き手が「相補的」なスタンスを取る場合（図5）、典型的にはアイコンタクトを伴う対面的なコミュニケーションの状況が生じる。両者は2つの独立した主体として、能動的な役割と受動的な役割を交互に交代する。両者の輪郭も明瞭である。このことはしかし、話し手と聞き手が「同型的」なスタンスを取る場合には当てはまらない（図6）。

ところで、この同型的スタンスは近年言語研究のレベルでも言及されることのある「共同注意」(joint attention)を想起させる(Tomasello (1999), 本多 (2011) など)。共同注意とは、概略、他者といっしょに、同じものに、同じように注意を向けることであり、事物を仲立ちとして複数の人々の間に意図や感情のつながりを生み出す間主観的なプロセスである。ただし、共同注意は相補的なスタンスでも成立し得る点に注意しておく必要がある(次の図7a)。つまり、共同注意は常に同型的なスタンスと共起するわけではなく、図7a~cに示すように、さまざまな段階を想定することができる。このうち、図7cは2人の人間の視点が完全に重なった状態を示している<sup>2</sup>。



a. 相補的

b. 同型的

c. 最大限に同型的

図 7：共同注意と相補性・同型性

一般的に言って、日本語の聞き手は同型的なスタンスを、ドイツ語の聞き手は相補的な

<sup>2</sup> 視点の完全な一致というのは実際には心理的なレベルでしか生じ得ないが、映画やコンピューターゲームでは、「主観カメラ」や「一人称視点」と呼ばれる手法により、仮想的にこの状況を体験することができる。

スタンスを取る傾向が強い (Ozono (2013, 2017))。ただし、これはもちろん程度問題であり、文脈や場面によるところも大きい。例えば、サッカースタジアムでサッカーの試合を観戦している状況を想像してみるとよい。サポーターが自分たちのチームを応援するときは、ドイツであれ、日本であれ、同型的なスタンスが基本である。そのような場面での発話 (例えば, *Schieß doch!* 〈打て!〉や *Ach schade!* 〈惜しい!〉) は、アイコンタクトなしに発せられるものであり、特定の聞き手を想定することも難しい。したがって典型的な対話と呼ぶことはできないが、ある種のコミュニケーション機能を認めることはできるであろう<sup>3</sup>。

ではなぜ聞き手のスタンスが、日本語では同型的な傾向を示し、ドイツ語では相補的な傾向を示すのか。これは話し手の事態把握のスタンスと関連していると考えるのが自然であろう。話し手が自己中心的な、「主客未分」のスタンスを取れば、聞き手はその視点に寄り添う形で発話を理解する必要があり、必然的に、同型的なスタンスを取ることになる。これはもちろんドイツ語でも同じである。次のような例がわかりやすい (口語的な表現である)。

- (7) Nach dem Bahnhof kommt gleich rechts ein großes Kaufhaus.  
 after the station comes at once on the right a large department store

ただし、この関連で注意しておかなければならない重要なことは、話し手と聞き手のスタンスは常に一致するとは限らないということである。俳句の例でみておこう。

- (8) a. <sup>このみち</sup>此道<sup>ゆくひと</sup>や行人なしに秋の暮 (芭蕉)  
 b. Diesen Weg / geht niemand / an diesem Herbstabend. (D. Krusche 訳) 〈直訳：この道を / 行く人はいない / この秋の暮れに〉

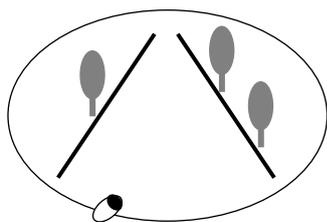


図 8：自己投入的な読み

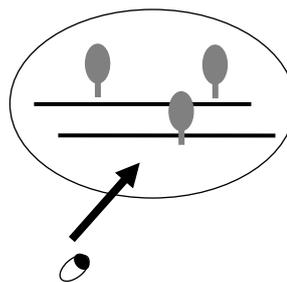


図 9：客観的な読み

学校教育の影響も考えられるとは言え、日本語母語話者にとって、上の句では芭蕉自身が「この道」を行く人であり、その芭蕉が目の前に見えている道について述べているということは、ほとんど自明のことのように思える (図 8)。しかしながら、この句はある任意の道の様子を描写したものとして読むことも可能である (図 9)。興味深いことに、この句を訳した Krusche 自身が、巻末の解説でこの句の解釈の仕方について注意を促しており、

<sup>3</sup> この関連で、日本語のモノローグ的な特徴への言及 (例えば、池上 (2000)) は興味深い。

ドイツ語母語話者の読みに揺れがあることを示唆している<sup>4</sup>。

さて、これまで聞き手側からの視点の歩み寄りにのみ着目して話を進めてきたが、実際には、話し手側でも、聞き手の視点や注意を考慮し、その視点や注意を誘導したり、調整したりするような言語的手段を用いているのがふつうである。すでにいくつかの先行研究で指摘のあるとおり、とりわけ日本語の話し手は共同注意を志向する傾向が顕著であり、そのための言語手段を多用している(池上・守屋(2009))。例えば、間投詞、終助詞、直示、特定の構文などの使用が該当する。その一部は、かなりの程度日本語の文法体系に組み込まれているといつてよいであろう。

一方、日本語との対比を通じて、ドイツ語でも間主観性を反映した言語現象が潜在的・顕在的に存在することが見えてくる。本稿では詳しく取り上げる余裕がないが、間主観性の観点から論じるべきドイツ語の現象として、例えば次のようなものを指摘することができる(Ozono(2013))。

- (9) *Wie fühlen wir uns heute?* [1人称複数代名詞の使用]  
〈今日の調子はどうかな。英：*How are we feeling today?*〉
- (10) *Dieser Peter ist ein netter Kerl.* [直示]  
〈このペーターがいいやつなんだ。〉
- (11) *Das Buch da, ich glaub, ich kenne den Autor.* [自由テーマ]  
〈あそこのあの本、著者を知っていると思う。〉
- (12) *Das Buch, das habe ich doch gestern zurückgebracht.* [左方転移]  
〈あの本、あれは昨日戻しておいたよ。〉
- (13) *Wann schenkst du ihm denn den Fußball?* [不変化詞(心態詞)]  
〈いつ彼にサッカーボールをプレゼントするの。〉

これら一連の表現に関して、日独語間の決定的な相違はその定着度・義務性にある。例えばドイツ語には、日本語の終助詞と対比し得る一連の不変化詞(心態詞)があるが<sup>5</sup>、その義務性は日本語の終助詞に比してそれほど高くない。

- (14) a. いい天気ですね。
- b. *Es ist (ja) schönes Wetter.*  
          it is JA beautiful weather

話し手と聞き手の間で情報が共有されている場合、日本語の対話では「ネ」の使用はほ

<sup>4</sup> 中村(2016)は、「主客未分」の認知モードでは、時間、場所、人称の「無限定性」が特徴的であると述べ、例えば次のような例から、よく言われる日本語の「イマ・ココ・わたし」性は再考を要するとしている(下線は原文のまま)。

(i) その夜、外に出て見た。寒い! 春樹はあわてて中に入った。(中村(2016: 42))  
ただし、話し手と聞き手の間で誤解が生じ得るという事実などを踏まえると、「無限定」の様相を示す現象の背後にも、認知主体、話し手(語り手)、聞き手(読み手)の間の「同型性」の認知プロセスが存在することを考慮しておく必要があると思われる。本稿の(6a)の例も参照。

<sup>5</sup> 文法書などでは「話法の不変化詞」(modal particle)として分類されることが多い。日本では特に「心態詞」と呼ばれることがある。詳しくは岡本(2013)を参照。

ば義務的である（例えば、神尾（1990））。晴れ渡った青空を目の前にして交わす会話として、日本語で「ネ」のない表現はかなり不自然である（「いい天気です」「ええ、いい天気です」）。ドイツ語の不変化詞 *ja* も、話し手と聞き手の両方にアクセス可能な証拠の存在を示すとされ（König（1997））、その点においてドイツ語の *ja* は日本語の「ネ」と機能的な類似性を示す。しかしながら、ドイツ語の *ja* の使用は義務的ではない<sup>6</sup>。

## 5. おわりに

以上、主に視点に関する話し手・聞き手の振る舞い方について、日本語、ドイツ語、英語を例に考察してきた。これまでも指摘されてきたとおり、日本語の話し手は、確かに「自己中心的」な視点から事態を把握し、言語化する傾向が強い。そして、考えてみれば当然のことであるが、聞き手の側でも、話し手の発話を「自己中心的」な視点から発話されたものとして理解する傾向が強いといえる。ただし、聞き手が一方的に話し手の視点に歩み寄るというだけでなく、話し手の側でも、聞き手の視点に注意を払い、さまざまな言語手段を用いてお互いの視点を調整している。それらの言語手段の義務性という点からいって、日本語は体系的にそのような仕組みを備えているといえるだろう。

簡潔にいつてしまえば、日本語の話し手と聞き手は「いっしょに見る」という形での対話を好むということがいえる。ただし、この点についてはもう少し説明が必要である。というのも、ある事態について話をするとき、「いっしょに見て」話をしているということは、どの言語の話し手・聞き手にも等しく当てはまることだからである。言語間の相違は、臨場性の度合い、さらには視点の重ね方の度合いの相違として説明されなければならない。すなわち、「いっしょに見る」というときに、日本語母語話者は、臨場的に、視点を重ね合わせながら見ているという点が重要である。

最後に、視点の取り方についての好みは文化的な問題にも見出すことができる。すぐに思い浮かぶのは、対話における目の合わせ方であろう。日本人が相手の目を見て話さないというのは、次の引用に見るように、すでに知られた事実である。

- (15) 目の合わせ方に気をつけてください。相手の目を直視し過ぎると、日本人は不安になることがあります。（R. Menge, *Praxisführer Japan* 〈実践日本ガイド〉, 2009: 75; 訳は筆者）

ほかに北山（2005）は、日本の浮世絵において「共に眺めること（共視）」という構図が特に好まれているという観察を出発点として、幅広い日本文化論を展開している。この関連で、能におけるワキという役割——観客が視点を合わせる拠り所となっていると見なすことができる——も思い起こされよう。熊倉（2011: 174ff.）は、この点を捉えて「一人の主観を大勢でシェア」しているという言い方をしている<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> 英語についていえば、心態詞相当の語はまったく存在しないか、少なくともごく限られた範囲でしか存在しないとされる（Müller（2014: 5ff.））。

<sup>7</sup> さらに、一連の現象を土居（1971）のいう「甘え」の概念との関連で考えてみることも可能かもしれない。例えば例文（9）などを参照。なお、「甘え」の訳語として、ドイツ語では通常、英語訳にならって *Abhängigkeit* 〈依存〉などの語が用いられるが、土居（1971）のドイツ語版では、*Freiheit in Geborgenheit* 〈守られた中での自由〉という副題が付けられている。

ドイツ語に萌芽的にみられる現象を踏まえると、視点に関わる話し手・聞き手間的主観的な相互作用に関して、言語を超えた共通の基盤が想定できそうである。ただし、言語によってその適用の度合いは異なる。おそらくその相違は、最終的には当該の言語体系の中で十分に動機づけられているとみなすことが可能ではないかと思われる。

#### 主要参考文献

- 土居健郎 (1971) 『甘えの構造』 弘文堂, 東京.
- 浜田寿美男 (1999) 『「私」とは何か』 講談社, 東京.
- 本多啓 (2011) 「共同注意と間主観性」『主観性と主体性』 澤田治美 (編), 127-148, ひつじ書房, 東京.
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社, 東京.
- Ikegami, Yoshihiko (2015) “‘Subjective Construal’ and ‘Objective Construal’,” *Journal of Cognitive Linguistics* 1, 1-21.
- 池上嘉彦・守屋三千代 (編) (2009) 『自然な日本語を教えるために』 ひつじ書房, 東京.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 大修館書店, 東京.
- 北山修 (編) (2005) 『共視論』 講談社, 東京.
- König, Ekkehard (1997) “Zur Bedeutung von Modalpartikeln im Deutschen,” *Germanistische Linguistik* 136, 57-75.
- 熊倉千之 (2011) 『日本語の深層』 筑摩書房, 東京.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- 三瓶裕文 (2017) 「心的視点性と体験話法の機能について」『自由間接話法とは何か』 平塚徹 (編), 143-192, ひつじ書房, 東京.
- Müller, Sonja (2014) *Modalpartikeln*, Winter, Heidelberg.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学」『認知文法論 II』 中村芳久 (編), 3-51, 大修館書店, 東京.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編), 353-393, 開拓社, 東京.
- 中村芳久 (2016) 「Langacker の視点構図と (間) 主観性」『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 中村芳久・上原聡 (編), 1-51, 開拓社, 東京.
- 岡本順治 (2013) 「心態詞」『ドイツ語の文法論』 岡本順治・吉田光演 (編), 243-264, ひつじ書房, 東京.
- Ozono, Masahiko (2008) “Subjektive und objektive Auffassung,” *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (1), 75-90.
- Ozono, Masahiko (2013) “Intersubjektivität im deutsch-japanischen Kontrast,” *Beiträge zur deutschen Sprachwissenschaft* ed. by Japanische Gesellschaft für Germanistik, 88-102, Iudicium, München.
- Ozono, Masahiko (2017) “Subjektivität und Intersubjektivität bei der Raumauffassung,” *Raumerfassung*. ed. by Akio Ogawa, 77-87, Stauffenburg, Tübingen.
- Tomasello, Michael (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard University Press, Cambridge, MA.